

■特集■食の歌を考える 〈春〉

春の味

「春の皿には苦みを盛れ」という言葉があるようだ。「春の味」には山菜などのほろ苦さ、主菜ではなく副菜、または酒の肴にふさわしい大人の味のイメージがある。一方で春キャベツや新玉葱のようにふつくと甘いものがあり両極に分かれている。

- ・今何を考えている菜の花のからし和えにも気づかないほど

俵万智『かげのてのひら』

「春の味」と聞いて真っ先に思い浮かんだ一首である。春到来の話題になるはずの「菜の花のからし和え」が、転勤前の父親とのほろ苦い空気を醸し出している。

- ・よれよれの夫のために一匙のふきのとう味噌ごはんにのせる

前田康子『窓の匂い』

頭の中にすぐ画の浮かぶ歌である。「よれよれの夫」には、ふきのとう味噌をのせたやさしいご飯がとてもよく似合う。夫は歌人の吉川宏志。生気を取り戻せたことだろう。

- ・せりなづなすずなすずしろ清らかに生きしごとく白粥を吹く

川野里子『歓待』

サ行の美しい調べの中に「清らかに生きしごとく」が効いている。七草粥は見た目にもやさしい。粥の湯気を吹いているとゆるやかな時間とともにあたかも「清らかに浄化されてゆくような自分、を客観的に見ている。

- ・桜鯛きのこ添へなるこの星の恵みじんわり食みて忘るる

尾崎まゆみ『明媚な闇』

この歌人の作風はどこか異国の匂いがして生活感がない。「桜鯛のきのこ添へ」はフレンチだろうか。やわらかい春の色彩が見えてくる。「じんわり」と味わって「忘るる」という軽やかさに春のとりとめのなしさびしさがある。

- ・死ぬときは一緒よ」と小さきこゑはして鍋に入りたり蛭一族

小島ゆかり『ごく自然なる愛』

岸並千珠子

- ・春やよひやましじみは椀の中うすむらさきにひらきてゐるも

三井ゆき『池にある石』

二首ともシジミを詠んだ歌であり「死」を詠んだ歌でもある。一首目、蛭を湯に放つ時、または生きているものを調理する時のふとよぎる罪悪感に焦点をあてた。蛭のいじらしくも少し怖い言葉が印象的である。二首目、「うすむらさき」はやまとしじみの稚貝の内側の色。花のように開いているが、それはしじみの亡骸なのだ。

次も小さき命を感じる歌。

- ・箸先に生きて身をそる白魚をのみこみし夜半ひとりするどし

松坂弘『春の雷鳴』

- ・生きながらシロウオ一〇〇匹沈めたる身を慎めり 南無阿弥陀仏

桑原正紀『秋夜吟』

白魚とシロウオ（別種）を詠んだ二首。踊り食いは直に命を感じる最たるものだろう。罪悪感の持ち方もそれぞれである。シ